

一人ひとりの想いつたえたい >>> あなたの声でつくる情報誌

NO. 66

2007・春号

まなこ

企画・発行

武蔵野市企画政策室市民活動センター男女共同参画担当



特集 新しい自分、新しい人生

取材

- 団塊世代 — これからの目線 —
- 人生は自分が決める
- 楽しいことは、まだまだこれから！
— 仕事も家庭も頑張ってきた女性たちへ —

井波 信一さん
藤沢 俊郎さん
原田 良枝さん

寄稿

- ・ いつも「出会い」から始まる
まなこレポーター 真壁 正江

情報

- ・ 平成 19 年度男女共同参画推進団体の登録・更新について
 - ・ 市民がつくる男女平等情報誌『まなこ』レポーター募集
- 市民活動センター男女共同参画担当

団塊の世代の人たちが退職を迎える現在、余暇の時間の使い方や生きがい探しへの関心が高まっています。スピードや効率性ばかりが重視される忙しい生活から一歩離れ、自分自身の時間を取り戻したら、思いもかけなかったような新しい人生への扉が開けるのではないのでしょうか。

1年間の締めくくりとなる66号では、「新しい自分、新しい人生」をテーマに取り上げます。

団塊世代 — これからの目線 —

井波 信一さん 緑町



3人の仲間と一緒に「日曜喫茶」ではマスターです。口ひげのせいでしょうか。

1947年～49年生まれのベビーブーム世代の人たちが定年になる。戦後の激しい変化の中で過密な教室で学び、女性の高学歴化の影響もあり狭き門だった入学試験、そして高度経済成長期の中でJUNやVANを着、ビートルズを楽しみ、バブル期を突っ走り、やがて崩壊。その多くの女性や男性が今年はいっせいに職場を離れる。そして専業主婦として支えてきた妻たちもまた、従来とは違う暮らしが始まるのだ。

「DANKAI プロジェクト」の理事である井波 信一さん（60歳）が語ることは……。

団塊力

井波さんは55歳の時に早期退職制度を利用して会社を辞めた。「妻とは年金が支給される60歳までの生活のメドがたつたら、セカンドライフをスタートさせたいと話し合っていたので……。1年間は、現代アートの作家である妻の希望や、私が興味を持つインドの仏教石窟寺院を訪ねるなど、海外旅行をして過ごしたが、地域に知人はまったく居ない。「ボランティアでも……」と思ったが自分に適したものは見つからなかった。03年11月、市報に載っていた（公募委員の募集）市民会議「団塊世代の主張」〈これからをどう生きる〉に応募。女性3人と4人の男性委員の一人として団塊世代が地域で生きがいを得るための討議と、翌年はそれには欠かせない健康、家族、生活、コミュニケーション、仕事について各委員が執筆したテーマ別市民会議報告書「団塊力」を市に提出した。

「DANKAI プロジェクト」って？

「団塊世代の主張」から生まれた市民公益団体です。この世代が持

つキャリアと活力を地域に活かし、これから新しい人生をスタートさせる同年代をバックアップすることが目的です。例えば団塊サロン。月に一度のペースで吉祥寺駅近くの喫茶店を借り切って同世代の市民とその時々のテーマで話し合う。会費はコーヒー代だけ。語らいパートナー養成講座は、高齢者たちのよい聞き手となる傾聴ボランティアを養成。講座終了後は福祉施設・病院などで活動している。また、^{※かこう}華甲（還暦）夢企画として、還暦以上の人たちが手がける社会貢献になる事業のアイデアを団塊世代から募り、その実現に向け計画をしている。

※華甲（還暦）夢企画コンクールは、07年3月25日実施

出来ることから

今の60歳は昔のご隠居のイメージはない。体力もある。見渡してみれば自分を生かし、楽しませる事柄に出会えるはず。「とにかく、顔を出してみる。出来ることからやってみる。引きこもらないで」とメールを送る。「私は妻とインドに旅行したことで、仏教を生涯学習のテーマと決め、武蔵野大学での仏教学の聴講生になりました。06年10月と今年

の1月に吉祥寺雑学大学にて仏教をテーマに講師を務めました。が、熱心な質問は私にとっても大いに勉強になりました。また、吉祥寺ナーシングホームで毎月第3日曜日の午後『日曜喫茶』をやっています。私がマスター役でコーヒーを入れます。お客は入居者や面会に来たご家族で、車イスの方が近くまで来て『おいしかった!』と言ってくれた時はとても嬉しかったですね。』

会社人間から家庭人間へ

井波さんが「団塊力」に執筆したテーマは「家族」だった。退職後により良い夫婦のためには現役の時から早めの準備と心構えが必要です、と強調している。

例えば、家庭内での基本的な役割分担を決める。「介護があれば共に手を出すのはもちろんですが、我が家では食事の後片付け、洗濯、ゴミ出しは私の役目です」。

夫婦共通の趣味や話題を必ず一つは持つ。「お互いに干渉はし合わないが、私の場合5月に青山で行う妻の個展には、搬入や搬出、ギャラリ―での手助けを予定しています。現役の時からしていました。お互い外

で見聞きしたことは話題にするようにしています」。

感謝や尊敬の気持ちを言葉に出すことも大切なこと。そして夫は会社人間から家庭人間への脱皮を、妻たちには家庭人間への脱皮に猶予期間を見てもらいたい。

団塊世代と他の世代の違いは?

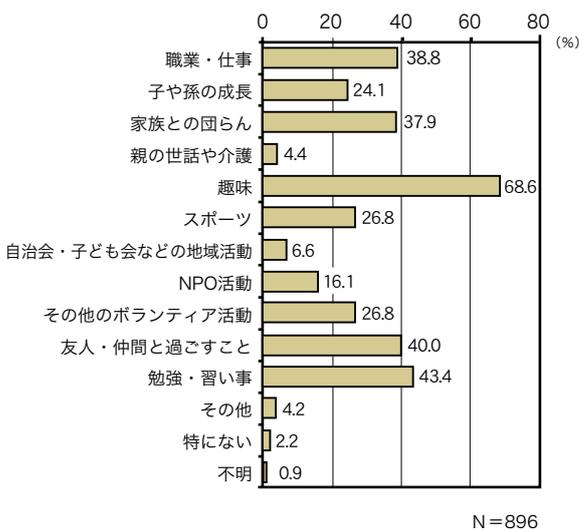
「団塊世代は子離れしている世代と言えるのでは……。多くが三世同居で育ち、結婚して核家族。自分が親になる年代では少子化傾向になり、定年後は夫婦単位、将来は一人暮らしが見えている。その生活経験からか、特に『子供の世話にはならないようにしたい』と言う女性が多い。未来志向だし、やりたいことが具体化しているのでは……。』と言う。

高学歴化と社会進出のさきがけとなった年代の女性たち、そして経済の浮き沈みを乗り越えたこの年代に精神的な自立とエネルギーを感じた。

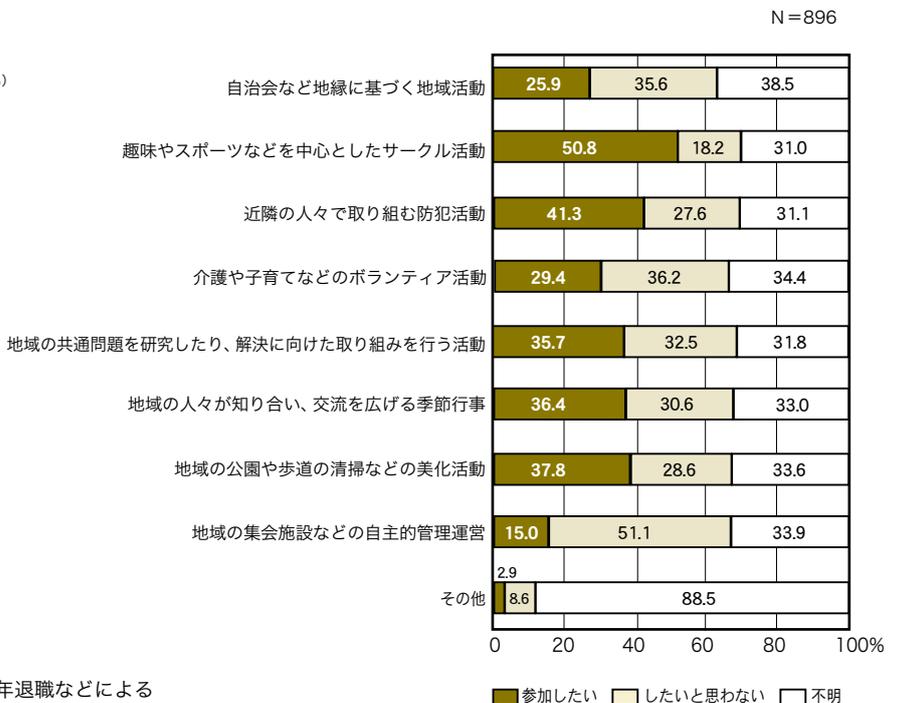
取材 浜俊子(文)

「DANKAIプロジェクト」事務局
 亜細亜大学 栗田研究室
 TEL/FAX 04222(36)73296
 e-mail dankai@gakushikai.jp

● 将来の生きがい



● 地域活動への将来の参加希望



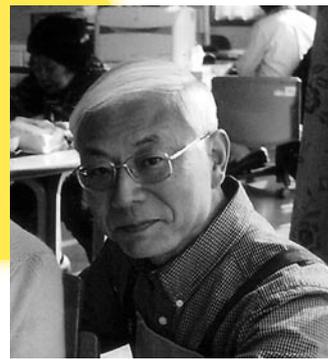
※「将来」とは、ここでは

- 現在、企業や団体などにお勤めの方で、いずれは定年退職などによる引退(リタイア)を考えている方は「退職後」
- それ以外の方は「おおむね60歳以降」

を想定し、お伺いしています。

人生は自分が決める

藤沢 俊郎さん 吉祥寺北町



団塊世代への社会からの期待や助言を、大きなお世話、と藤沢さんは笑う。藤沢さんは、すでにお勤め、ボランティア、趣味とバランスのとれた充実した毎日をご過ごしていらっしゃるからだ。そんな藤沢さんにお話をうかがった。

「製菓材料を輸入する会社に勤めています。今57歳です。会社から何も言われなければ定年後も働き続けます。経済的なこともありますが、月曜から金曜までは会社というパターンでいきたい、会社の中に自分の存在を置いておきたいですから」。

「小学校の頃、大きくなったらケーキ屋さんになりたい、というのが同じように、僕は大きくなったら社会に奉仕する仕事をしたかと思っていました。しかし、50歳過ぎまでは、仕事や家のこと、両親のことなどで心の余裕がなく過ごしてきました。10年位前に、武蔵野市にボランティアセンターができるということを知り、そのことがずっと頭の片隅にありました。5年前にふと、そこへ行ってみようという気持ちが湧いてきたんです。そこで登録を済ませ、まず単発のボランティアを経験した後、継続してできる所をというところで、吉祥寺ナーシングホームで現在は活動しています」。その活動は、デイサービスレクリエーション補助ボランティア

というお立場で、利用者へのお茶の提供や話し相手をなさることだという。



藤沢さんは別々にテーブルについている二人の利用者のそばに近づくと、同じ高さにしゃがんで小声で話し始めた。その様子はとても自然で、注ぐまなざしも温かい。藤沢さんは、高齢な方と接していると、例えば自分が75歳になったときの姿を予想できるという。また、今の高齢な方は関東大震災や戦争など過酷な時代を生きてきている。団塊の世代の自分たちにはそういう体験がないから、貴重な話が聞けるともいう。そうした触れ合いから、今の高齢の女性たちが経験してきた苦労が、この平和な世の中を作ってきたと思うんです、と語られた。そういうお気持ちでボランティアをされているからことさら充実感があるのだろう。藤沢さんは5年継続の表彰もされている。

ご家族は、奥様と20歳代の娘さん一人。いま奥様はご自分のお母様の介護に力を尽くされている。ボランティア活動に生き生き

としていらっしゃる藤沢さんだが、お宅での女性三人の中の藤沢さんの存在は、「ほとんど話題の外」に置かれているとご自身では思われている。しかし、下の娘さんの話をされたときは嬉しそうな表情をされた。というのは、何年前か前、なかなか就職の決まらなかつた娘さんが最終的に老人ホームに就職が決まり、今では福祉住環境コーディネーターの資格を持つまでになられたとのこと。どこかで後姿を見ていたのかと思い、びっくりした、とその頃を振り返って話してくださった。家事分担についてお聞きしたところ「僕の作った料理なんか誰も食べてくれませんよ。洗濯物をたたむことはします」とおっしゃる。でもきつと「自分のことは自分で」していらっしゃる藤沢さんだから、奥様は介護に専念できるのだしようと、察した次第である。



利用者の方も、藤沢さんに会うのを楽しみになされているのでしょう。

藤沢さんは、心の中でひっそりとご自分の寿命を決めているそう。そこに向かって日々健康に過ごす努力をしている。

「ボランティアを始めてからは、飲みに行かなくなりました。土曜日のボランティアを楽しみに一週間を過ごしています」。

それなら、健康でいられるのはボランティア活動のおかげかもしれませんね、という意見で一致して大笑いした。

月曜から金曜は職場のいろいろな年齢の人と過ごし、土曜日は「人生の先輩」と、そして日曜日は同世代の友達とテニスで交流。「それぞれ話題が違うんですよ」。

藤沢さんが高齢な方と接するときに気をつけていることは、「手がいやだと思っデリケートなことには触れないようにしています。相手の気持ちをキャッチする力が大事ですね。でも、言葉はどんなに注意していても間違えることがある。そんなときはすぐあやまります」。

ユーモアのある語り口と、何事もプラス思考で受けとめていらっしゃる姿勢が印象に残る取材だった。取材 栗原恵子(文)

楽しいことは、まだまだこれから！

仕事も家庭も頑張ってきた女性たちへ

原田 良枝さん 吉祥寺北町

画廊の片隅をアトリエ代わりにして
絵を描くこともあります。



54歳で早期退職し、吉祥寺駅隣接ビル5階でギャラリーを始めた原田良枝さん(76歳)は、武蔵野市立第四中学校の理科の先生だった。勤務時代(四中創立時期)の先生方と毎年1月に「けやき展」を開催。15回目を迎えた。

●親の決めたレール

20代の頃から絵は好きだったが、映画のプロマイドを見て鉛筆で描く程度。それを職業にする意思はまだなく、男女同権の教職を親に勧められ素直に従った。親の意思にそむけない時代でもあり、本人が教職を嫌いでなかったためもある。理科を専門に選んだ理由は「他が苦手だったから。消去法ですよ」。当時の親が、女子に職を勧めるとは「画期的でしたよね。母は専業主婦でした」。

●教職時代の子育て

長男出産当時は、保育園も産休中の補助教師などの制度もなかった。産前産後数週間休むために、前もってプリントを用意し同僚に預け、自習として自分の生徒に配ってもらうよう頼んだ。申し訳なかったが、当時の同僚や保護者は皆あたたかく、新しい命の誕生を一緒に喜んでくれた。長女出産時には制度も整い始めた

が、保育園の送迎など、母親の援助が得られない周りの女性は次々と辞めていった。「私は恵まれていたのじゃないか」。同業の夫の理解と同居の母の協力がなければ、33年間も教職を勤めることはできなかったと断言し感謝する。

常に厳格さを求められ気が抜けない職だが、教師を敬う時代でもあったので気持ちに余裕が持て、生徒たちを家に呼んで食卓を囲んで語りあうこともあった。「お砂糖をかけたトマトが忘れられない」「あのチラシ寿司おいしかった」今は団塊世代に近い生徒たちがその頃を懐かしんでくれる。今年のけやき展が、出展者の高齢化と病気で開催不可となりかけたときも、背中を押してくれたのは教え子だった。あのチラシ寿司を作ったのは母だったと言えなかったが「ありがたかった」。

●退職後は好きなこと

退職前から心の準備はできていた。絵を描きたい。40歳からずっとやっていた。その高揚感が定年まで待たずに気力体力を温存したままのスタートへとつな

がった。3月末日退職。翌朝の万歳。「これで好きなことができると！」時間がないんだよ、という夫の口癖に押されて、すぐ武蔵野美術学園へ2年。絵を習ううちに気持ちは画廊経営へと変わっていった。識者に助言を求めると、「利益を上げたいなら止めて置け」と銀座の画廊経営者。美術関係の新聞記者には「地域に奉仕する画廊を」と言われた。

「お金儲けじゃない。趣味を活かして生きがいを持てるだけでいい」覚悟は決まった。経験も知識もないまま始められたのは熱意と無欲と楽家天家ゆえ。「運がよかったのかもしれない」。その後バブルへ入り軌道に乗った。はじけると一転、思うように絵が売れない。画家に申し訳なく自分で買ったことも度々。「赤字の画廊は継げません」と娘にいわれたこともある。

●目の前30年と母

開業を志すとき賛成してくれなかった母は当時で84歳。とにかく元気だった。「30年後もあんなに元気であらう。としたら、あと30年もある。もうひと仕事でき

●変わる自分

これから定年の方へ

家事も育児も仕事もと、定年までがむしゃらに働いた女性。「その苦労はいかばかりかと心から尊敬します。脱帽です」。でも、退職と同時に、もう何もしたくない、時計のない生活をしたくない、と急停止して体を壊した友人がいる。「車は急に止まれないのよね」。

仕事に追われて後回しにしてきた家事。はじめは、心ゆくまで片付けてみるのもいい。でも「2年過ぎるまでには、何か楽しいことに手をつけてみてほしい。まず一歩をふみだすことです」。

凛とした姿勢を求められた教職時代の自分からは想像できないほど、今、画廊では「優しく柔らかく自然体でいられます。楽しいことをしていると、自然と笑顔になれるから」ぜひ定年後は好きなこと、楽しいことを！

取材 福井真美子(文)

森 治美



いつも「出会い」から始まる

まなこレポーター 真壁 正江



何かを始める時、先に計画ありきか、出たとこ勝負となるのか。最近、人間の行動の最終決断は、「感情」によって動かされると聞き、なるほどと合点がいった。

出産後、夫と交互に育児休業をとり当然のこのように職場に復帰した。保育園入園後は核家族ゆえ夫婦の協力体制の下、民間の保育サービスや病児保育室をも頼り毎日を何とか乗り切った。今、振り返ると何かを深く考える時間はなく職場に保育園からの呼び出しの電話がない事に安堵する一日の積み重ねが二年半は続いたであろうか。そんな日々が成長と共に一段落し病気になることもなくなり育児が急に楽に思えてきた。と同時に子どもと過ごす時間が無性にいとおしく思え、その「感情」に突き動かされるように職場内調整など準備期間を経て退職した。子どもを幼稚園にお願いすることにした。

退職一年目は地域で子どもを育てることを意識し、「子どもと遊びと文化」をテーマに自主企画を十回実施した。二年目は、子どもの遊びの質について、また家庭の文化をどう伝えるかを地域にある複数の団体と交わりながらじっくり考える機会を得た。初めて子どもと梅干を漬けてみた。今日もお弁当の彩りに大きな梅干が鎮座している。また「武蔵野の森を育てる会」の活動を通して武蔵野の自然を登降園時に五感を通して満喫している。一緒に植栽をし、日常の作業で出会ったことを子どもは「絵本風」に仕立てている。今後、この二年間に出会えた人とのつながりの中で、自分の専門性をどのように活かすことができるか模索してみようと考えている。

子どもが生後三ヶ月の時、満開の桜の木の下で初めて出会う小学一年生の男の子たちに揉みくちゃにされながら嬉しそうに笑っていた。その時の出会いを思い出す度に幸せな気持ちになる。今春入学の子どもはまた多くの人と出会うだろう。その出会いが私の感情を動かすエネルギー源になると思う。

まなこ66号アンケートから

『まなこ』のアンケートはレポーターを中心にお願いしています(レポーターは毎年3月に募集。7ページ参照)

Q1 長年の仕事が一段落して時間に余裕ができたなら、どんなことがしたいですか。

- ・ミニコミ誌を作りたい。今まで興味を持って心の中で温めていたテーマに沿って、文章を書いて、友人たちに読んでほしい。
- ・一人旅 世界遺産巡り 史跡めぐり お寺めぐり 海外旅行 放浪の旅 巡礼の旅 鈍行列車の旅 エコツーリズム
- ・本をゆつくり読みたい。
- ・ずーっと先のことなので、見当もつかない。第2子が成人すると60歳なので、一段落する前にこの世にいるかどうかの心配が先。

Q2 自分のセカンドライフにどのような展望をもっていますか。

- ・年金が生活の基礎になると思う。それを少しカバーするくらいの気楽な仕事があったらしたいし、趣味を広げたい。
- ・資格や技術を持たない私は、年齢と共に働く場が制限されていくが、ささやかでも人とぶれあえる、人との出会いがある仕事をしたい。
- ・ずっと外国語に関わり周りからも評価されてきたが、人生の後半は母国語で何かしたい。
- ・夫の退職が、自分のセカンドライフの始まり?
- ・自らが健康で他人に迷惑をかけずに生活できること...それが一番。
- ・現在も翻訳を行って、社会に関する興味と文章修業を行っているが、ノンフィクションものも自分で書きたい。
- ・いくつになっても、過去を振り返るだけでなく、新しく何かを生み出したり、チャレンジしたりしたい。

市民活動センター 男女共同参画担当では

TEL 0422(60)1869 FAX 0422(51)5638 URL <http://www.city.musashino.lg.jp/>

*市民活動センターは4月から市民協働推進課に名称変更します。

■ 平成19年度男女共同参画推進団体の登録・更新について

育児、介護、環境などの問題研究や、趣味をとおして男女共同参画の推進を目指す活動をしている団体については、「男女共同参画推進団体」として登録しています。

登録の基準は、男女共同参画社会の実現に向けての活動を主たる目的として、継続的かつ計画的に活動する団体で、以下の5つです。

- ① 営利を目的とした団体でない
- ② 特定の政党、宗教又は教団を支援する活動でない
- ③ 団体の構成人員が5人以上で、原則として3分の2以上が武蔵野市内に在住
- ④ 団体の主な活動場所が武蔵野市内
- ⑤ 団体の組織及び活動のための規約を有する

登録団体は団体活動補助金の交付申請、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの印刷機使用料の半額免除やロッカーの年間使用などができます。

現在登録中の団体で、19年度も登録の継続、または抹消を希望される場合は送付済申請書を4月27日(金)までに提出してください。期日までに登録申請のありました団体は、団体名簿に登録し一般に公開します。

なお、新規登録は、随時受け付けております。

■ 市民がつくる男女平等情報誌『まなこ』レポーター募集

家庭、地域、社会、労働の場などで男性・女性が共に抱えている問題について関心がある方、活動している方を募集（ボランティア）します。

- 主な仕事
- ① 年4～5回のレポーター会議出席（1歳以上就学前のお子さんの保育あり）
 - ② 各号のテーマに関する意見、提言、情報などのアンケート提出
 - ③ 取材協力、記事の提供など

募集 市内在住・在勤・在学の方
15名程度（超えた場合は調整あり）
任期は1年間（平成20年3月31日まで）

申込み はがき・FAX（記入例参照）で、
4月6日(金)までに、
市民活動センター男女共同参画担当まで

（記入例）

- ① 『まなこ』レポーター希望
- ② 住所
- ③ 氏名（ふりがな）
- ④ 電話番号
- ⑤ わたしの興味ある『まなこ』のテーマ（100字程度）
- ⑥ あれば活動団体名

Q3 あなたの「これからの人生」で大切にしていきたいものは何ですか。

- ・日本の伝統文化 ・手仕事の大切さ
- ・健康。家庭の平和。親しい人との交際
- ・これまでも、これからも、一番大切にしていきたいものは、家族と友人。
- ・新しく出会った人とお互いを尊重しあって、いい刺激を受けたい。
- ・現在の生活に直接かわりを持たない学生時代の友達などとのつきあいは、新しい発見があったりして潤いと刺激を与えてくれる。
- ・知識ではなく、想像力を大切にしたい。何気なく出会う人々について、そのバックグラウンドを想像することで関係が深まったり、自分自身が豊かになるような気がする。
- ・誰かのためではなく自分が本当はどうしたいのかという「自分の想い」。自分のことは後回しにしてしまい後悔ばかり。自分自身をごまかすことなくきちんと向き合っていきたい。
- ・お金でできることは、大切なことかもしれないが、手に入らないものがあると思う。
- ・お金だけあっても楽しい人生を送れるとは思わないが、ないと悲惨。
- ・お金は計画的に用意しておきたいが、日々がつかつかの生活で、そんな雲の上のようなことは、今は考えられない。ためらいもなく「愛ですわ、おほほ」なんて言ってみよう。

*そのほか、専業主婦にセカンドライフはないのではないが等のご意見も寄せられました。

レポーター会議風景



1月15日(月) 10:00~12:00
市役所第602会議室にて

65号「夢をかたちに」について

- ・再就職支援の話が誌面のトップにきたのは良い意味で驚きだった。
- ・再就職にはパソコンの技術だけでなく、笑顔など自分の力をかたちにしていくのが大切なのだった。
- ・「夢をかたちに」というテーマ通り「かたちにするために」目標を立て、十分準備をして実現させていく話が聞けてとてもよかった。
- ・資料も多く興味深く見る事ができた。

66号「新しい自分、新しい人生」に向けて

- ・子育てで真っ最中。時間に余裕ができるとき、ましてや定年後など考えられない。そんな日が来るとは思えない。
- ・時間はつくるもの。大切なのは生涯学ぶことだと思う。そのためには健康が第一。
- ・男女雇用機会均等法ができた頃、私の職場の環境は何も変わらなかったと思う。
- ・女性たちにも転勤や残業がふりかかり、家庭との両立は難しく夢を捨て退職せざるを得なくなった。それをずっと後悔している人も多い。
- ・フルタイムで働きながらも定年後を見据えて準備をしている女性を知っている。
- ・物は溢れているが、誰もが人とのつながりを欲しているようだ。



ほん

今回のテーマに関する本を、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書の中から

● そつこん 卒婚のススメ



杉山由美子 著 オレンジページ

「離婚」ではなく「卒婚」。それは結婚を卒業し新たな人生をスタートさせること。積極的別居結婚、役割交替で妻が世帯主、夫 山暮らし 妻 都会生活、事実婚、子育て後の恋愛など、「卒婚」という言葉を足がかりに「結婚」という形にとらわれず、後半生を充実させようと自分たちのスタイルを作っていた8組のカップルを紹介している。子育て後の夫婦はもっと自由であっていいはず。結婚の新しい形を考える1冊。

● シクスティーズの日々 それぞれの定年後

久田 恵 著 朝日新聞社



60歳代とは残された人生へ向けてそれぞれの暮らし方や生き方を変える人生の転換期。「お願い、あなたはひとりで先に逝って」「ペーパー離婚をしてみたら」「あの時から自分で慰謝料を稼いでいたのよ」……目次からも見える男女44人の本音が集められている。今まで過ごしてきた自分たちの過去に、夫婦でどう向き合うか、あるいはひとりでどう生きるのか、「これから」の生き方への鍵になる何かが見つかるかもしれない。

武蔵野市境2-10-27武蔵野市政センター2階 TEL・FAX 0422 (37) 3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp URL http://www.mhnc.jp/

STAFF

- レポーター 石丸俚恵子・上野敏子
後藤 瞳・田村恵子
平井弥生・真壁正江
- 取材・編集 森 治美(編集長)
栗原恵子・戸田真帆子
浜 俊子・福井貴美子
松田理恵
- ☆他にもたくさんのアンケート協力員、編集協力員に支えていただいています。
- レイアウト 小井戸厚子
イラスト 本田 倫
印刷 社会福祉法人東京コロニー

お詫びと訂正
07年1月15日発行『まなこ』65号裏表紙レポーター会議の「64号について」上から2行目をお詫びして訂正いたします。
誤 ぼけると ↓ 正 認知症になると

編集後記

★団塊世代であるつれあいには、まずは健康で、すがすがしい印象をもたれる人になってもらいたい。(栗原)

★思いがけず恩師から声の便りが届いた。「新しい人生」を噛み締めながら私にエールを送ってくれた。よしっ、未来に向かって頑張ろう！(戸田)

★間もなく歩み始める新しい幼、小、中学生や社会人。そして大定年、2007年問題などと言われた人たちの歩幅が広いことを期待して……。(浜)

★拙いままの卒業ですが、惜しんで下さる方もしいらっしゃれば幸いです。おつきあい頂き有難うございました。(福井)

★節目を迎えるたび、あふれる気持ちにけじめをつけてきたけれど、気負わず自然に一步踏み出してみてもいいのかな。(松田)